

2010年4月12日
岸 宣仁

I. 特許価値評価手法：YKS手法とは何か？

YKS手法とは、特許権の価値が独占排他力にある点に着眼し、それを指数で表現する特許の価値評価手法である。特許は競争相手を市場から排除する機能をもつ。しかし、競争相手は排除されまいとして自身にとって邪魔な特許、危険な特許を制度上認められている手続きを利用してつぶそうとする。この行為が繰り返し行われれば行われるほどそれに耐えて生き残っている特許は競争相手を市場から排除する機能（独占排他機能）を強く果たしていると考えられる。そこで、YKS手法では、特許庁が公表する特許ごとの手続履歴から競争相手からのかかる行為を抽出し、その頻度や、程度を競争相手が費やした手続費用の観点から集計し数値化する。またこの手法により算出される値をYK値と呼ぶ。

II. YKS手法によりわかること

YKS手法によるYK値は、競争相手からみた特許ごとの逆人気投票という性質を備える。逆人気が高ければ高いほど競合企業間で大きな排他力を持つ特許であることがわかる。また特許1件1件には多数の属性が紐づけられており、属性ごとにYK値を集計することで、多数の側面から排他力を観察することができる。例えば、企業ごとの集計、企業と技術分野ごとの集計、発明者ごとの集計、企業と出願年ごとの集計などである。また特許庁が公表するデータは上場・非上場、企業・個人を問わずにすべて公表されるので、YK値を用いて日本の産業の全体についてデータを取得することができる。さらに、YK値は統計的に経済指標に先行する予測指標として利用できることが示されており、各種の経済予測や企業の経営分析に有益なデータを提供できると思われる。

III. YKS手法の株式市場における応用

現状、株式市場においては企業の技術競争力の理解の困難性からこれを織り込む時期が技術が芽生えてから相当の期間を経過したのちとなっている。

YK値はその成り立ちから、競争力のある技術の芽生えを日本のなかで最も早く検知できる性質を有しており、株価の先行指標として機能することが統計的に示されている。

昨年4月に技術競争力の観点から企業を評価した「YK値」と、投資家の企業評価である「時価総額」との歪みから、技術競争力からみれば優れた企業であるにもかかわらず、市場からの評価が低い企業をピックアップしてリストとして経済紙に掲載した。ピックアップされた上位企業群（100社）の株価上昇率は約9カ月後に16.8%となり、TOPIXと比較して2.7倍程度の株価上昇率となった。つまり、企業の技術競争力を予測指標として利用すれば、企業の市場評価の将来変動を早期に認識することが可能となり、日本全体の投資配分を適切化することで企業の成長を促進することも可能になるだろう。